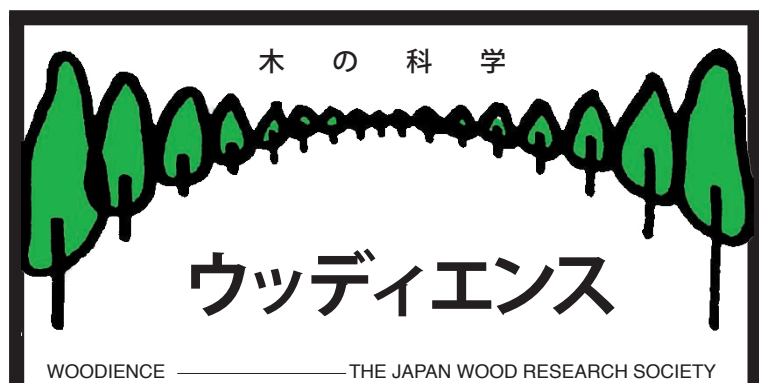




ウッディエンス
第 69 号
2005 年 12 月 25 日発行
日本木材学会
〒113-0023
東京都文京区向丘 1-1-17
タカサキヤビル 4F
☎ (03) 3816-0396
<http://www.jwrs.org/>



Since 1955
50th Anniversary

日本木材学会新執行部のご紹介

日本木材学会会長 今村祐嗣

学会の日常的な運営を担っている常任委員会をご紹介したいと思います。常任委員会は会長、副会長と 5 名の常任委員および事務主事で構成されていますが、今期から副会長は二人制になり静岡大学の祖父江信夫と東京大学の鮫島正浩です。常任委員は、総務担当の東京大学の竹村彰夫、渉外担当の名古屋大学の福島和彦、情報・事業担当の東京農工大学の岡山隆之、会計担当の森林総合研究所の高野 勉、そして編集担当の小松幸平です。事務主事は布川綾子です。なお、木材学会誌と Journal of Wood Science の編集関係では八田陽子が業務に携わっています。



左から岡山、鮫島、八田、今村、福島、小松、竹村、祖父江、高野、布川の各氏

今期の学会執行部は理事会と力を合わせ、50 周年記念事業の推進、学会のあり方の検討、学会の活性化への取り組み、社会との連携の強化、事務局体制の充実強化、を活動目標に掲げています。今後とも、皆様方とともに学会活動を発展させていきたいと思っています。よろしくご協力をお願いいたします。 ■

目 次

- ▶ 日本木材学会新執行部のご紹介 … 1
- ▶ インドネシア・ジャワ島 早生樹植林地と木材産業見学ツアー … 2
- ▶ Mokkiten Nagoya への出展報告 … 4
- ▶ Mokkiten Nagoya 記念シンポジウム … 6
- ▶ IAWPS2005 が盛大に行われました … 7
- ▶ 第 12 回九州支部大会報告 … 9
- ▶ 第 17 回中国・四国支部研究発表会報告 … 11
- ▶ 2005 年度中部支部大会開催顛末記 … 12
- ▶ 第 37 回北海道支部研究発表会報告 … 13
- ▶ 新刊書紹介「木工技術シリーズ」 … 14
- ▶ 今後の「ウッディエンス」と広報・情報委員会の課題 … 15

日本木材学会創立 50 周年記念事業 R&D ツアー報告

インドネシア・ジャワ島 早生樹植林地と木材産業見学ツアー

名古屋大学大学院生命農学研究科 松下泰幸

日本木材学会 50 周年記念事業の一環として、飯塚堯介 東京大学大学院農学生命科学研究科教授を団長とする記念海外 R&D ツアー第二弾「インドネシア・ジャワ島 早生樹植林地と木材産業見学ツアー」が、平成 17 年 9 月 18 日から 24 日の日程で執り行われた。このツアーは（故）奥山剛教授（名古屋大学）によって立案されたものである。

東ジャワのスラバヤから出発し、プロボリング、クリチル、チェブを経由して、中部ジャワのジョグジャカルタまでの行程で、移動はすべてバスであった（全走行距離 1012 k m）。このバスはトイレットつきの大型長距離用で、椅子の配置が非常にゆったりとしており、快適に旅行を楽しむことができた。以下、簡単に旅行記を記す。

1 日目（プロボリング、クリチル バス走行距離 230 k m）

プロボリングにある PT. KUTAI TIMBER INDONESIA (KTI) 社見学。この会社は 1970 年に住友林業により、南洋材原木の調達と合板工場経営を目的とする合併事業として設立され、現在では、合板、L V L、集成材等の木質ボードや建具（住宅部材）を製造している。KTI 社では植林事業にも力を入れており、原材料に占める植林木の割合を現在の 30% から 70% まで引き上げることが目標としている。この植林事業に関しては、インドネシア軍との共同プロジェクトとして、標高 1000 m もの高地であるクリチルで植林実験が 2002 年から開始されている。主力樹種であるファルカ

タをはじめバルサ、グメリナ、ワルー（ハイビスカス科）などが試験植林されている。また、農民との共同植林（Social Forestry）も行われており、近所の農民に苗を安価に（250rp; 約 3 円）提供し、成長後、買い取るシステムを 2003 年からスタートさせている。これら試験樹木の見学のほか、表敬訪問者による植樹コーナーが設けられており、飯塚団長のほか数名の方によりファルカタ苗の記念植樹を行った。

2 日目（クディリ、パンドントヨ、バス走行距離 368 k m）

Perum Perhutani（ジャワ森林公社）東ジャワ KPH（日本で言う管区）クディリ BKPH（事務所、営林署）にあるソロモン群島産ファルカタの植林地と、BKPH の下部組織である RPH（出張所、支社）が管理しているパンドントヨの植林地の見学。ソロモン群島産ファルカタは通常のファルカタよりも種子が大きく、成長が早いとのことで、インドネシアではここでのみ植林されている。ここでも近所の農民と良好な関係を築いており、KTI と同様に安価な値段で農民に苗を与えてもらうシステムを採用している。なぜ、このようなシステムを用いているのかというと、一番の目的は盗伐を防ぐためである。つまり、自分が育てている樹木はきちんと管理するだろうという目論見である。インドネシアにおける不法伐採は異常であり、総取引量の約 80% がイリーガルだそうである。また、インドネシアではアグロフォレストリー（農作物との混合植林）が一般的に行われている。



写真 1 KTI 植林地での記念植樹

るが、これにより毎年、農家が現金収入を得ることができ、充分な時間をかけて木を育てることができるのである。

3 日目 (チェプ、バス走行距離 200 km)

Cepu の Perum Perhikutani 経営の家具工場とチーク研究センターの見学。家具工場は 1976 年に設立され、現在では従業員約 400 名規模となっている。ここで使われているチークは大体 80 年生の材で、2 年間、まき枯らししたものを使用している。また、見学終了後、チーク残材を薪とする蒸気機関車に乗って植林地見学ツアーへと出発した。中部ジャワにおけるチーク植林の歴史は古く、約 150 年前のオランダ植民地時代にまで遡るそうである。自転車ほどの速度でゆっくりと進む中、植林地や畑、手を振る子供たちなどの車窓は、この旅のなかでも印象に残るものであった。

4 日目 (ジョグジャカルタ、バス走行距離 200 km)

ガジャマダ大学演習林見学。この演習林は Social Forestry として 1964 年に設立され、600ha の敷地に、アカシアをはじめ、ユーカリ、マホガニー、コクタンなどを植林している。その後、Community Forest の見学へ。インドネシアでは土地の所有権は認められておらず、山林はすべて国有で

あり、森林管理は政府が直轄管理するか、あるいは森林公社 (ジャワ島では Perum Perhikutani) によって行われている。この Community Forest というのは、私有林ではなく、森林公社が村落行政体に管理を任せているものだそうである。

5 日目 (ジョグジャカルタ)

最終日のこの日は、ガジャマダ大学林学部を表敬訪問した。ガジャマダ大学は 10 以上もの学部や数多くの研究所からなる文理総合大学であり、林学部は 4 つの学科 (森林経営、造林、森林保護、木材加工) から構成され、学生数は 2000 人という大学部である。Nai'im 学部長から "Present status of tree improvement in Indonesia" の題目で、チーク、メルクシマツ、メランチ類の植林事情についてのご講演がなされた。

今回のツアーでは、どの日もホテルへの到着が夜半になるなど、きわめて過酷なスケジュールであったが、しっかりした旅行計画やカウンターパートのお陰で、非常に快適にツアーを楽しむことができた。ツアーの陣頭指揮を執られた飯塚先生をはじめ、名古屋大学 山本浩之先生、ガジャマダ大学 Nugroho 先生、Joko 先生、Eka 大学院生に感謝の意を表すとともに、ツアー参加の皆様方に深く御礼申し上げます。■



写真 2 蒸気機関車による植林地ツアー

日本木材学会創立 50 周年記念事業報告

「Mokkiten Nagoya /Wood EcoTec 2005」への出展報告

名古屋大学大学院生命農学研究科 土川 寛

1. はじめに

社団法人全国木工機械工業会ならびに中部木工機械工業会の共同主催により、第 37 回名古屋国際木工機械展 / ウッドエコテック 2005 (Mokkiten Nagoya 2005 with Wood EcoTec 2005) が「ポートメッセなごや」において 4 日間(2005 年 11 月 3 日～11 月 6 日)にわたって開催されました。本展示会は、木工機械のメーカー団体がみずからこれを主催するという伝統をもっています。現在では、ドイツ・ハノーバー展、イタリア・ミラノ展、およびアメリカ・アトランタ展とともに世界四大木工機械展の一つとして数えられており、国の内外から高い評価を得ています。今回も各メーカーから最新の製材機械、合板機械、木工機械、木質系廃棄物処理機器その他関連製品が多数出品され、それぞれの分野における技術の現状と開発された製品に対して関係者から強い関心が寄せられました。来場者数は、延べ 22,782 人で前回より若干減少したものの、ビジネスの成約状況は向上傾向にあったとのことです。

期間中の特別行事として、当学会参画展示「環境共生社会をきずく木質の科学と技術」ならびに記念シンポジウム「環境共生社会に向けての木づかい エコロジーとエコノミーの接点を探

る」が開催されました。記念シンポジウムにつきましては、別稿に報告がありますので、ここでは展示企画について簡単に報告します。

2. 日本木材学会 50 周年記念特別展示の概要

メインタイトルを「環境共生社会をきずく木質の科学と技術」と定め、人間生活と地球環境が調和する科学技術を推進する当学会の広報活動の一環として、中部地区の 8 大学、10 研究機関が最新の研究成果に基づいて実演・展示を行い、木材利用の意義と重要性について来場者に判りやすく解説いたしました。以下、木工機械展ガイドブック掲載順に展示内容を紹介いたします。

① 名古屋大学大学院生命農学研究科：クラドニ図形による丸のこ振動の可視化実験、サーモグラフィによる節検出技術の実演、体重負荷による木質材料の曲げひずみ体感や、古材の強度特性や北極圏から出土した木質遺体などに関する展示

② 岐阜大学応用生物科学部：曲げ木や単板からのトレイ製作実験、ふしぎなキューピットの矢の製作実演、およびバインダーレスボードやバイオマスボード等の展示・紹介

③ 静岡大学農学部：建築材料から放散する VOC、ホルムアルデヒド等を測定するスモールチャンバーの展示と、測定方法等の紹介

④ 名古屋工業大学工学部建築・デザイン工学科：解体建物中間処理施設に集積された軸材の概要調査ならびに溝加工を施した板材の諸性能の紹介

⑤ 中部大学工学部建築学科：中国少数民族(トン族)の優れた木造建築技法に関するモデル・ミニチュア・写真(鼓楼、橋亭、舞台、倉庫な



写真 1 展示ブースの様子

ど)の展示・紹介

⑥ 愛知教育大学：竹活性炭や連続プレスによるエンボスマットの展示・紹介、ならびに愛知万博出展時に作成された「森林と人間の関り」を歴史的背景からとらえたコンピュータアニメーションの放映

⑦ 岐阜大学教育学部：当該機関の研究・教育活動の紹介および第 4 回全国中学生ものづくり競技大会での優秀作品の展示

⑧ 岐阜県立森林文化アカデミー：木質ペレット製造装置の展示および「自力建設プロジェクト」等の当該機関の研究・教育活動の紹介

⑨ 独立行政法人 産業技術総合研究所中部センター：曲げ木加工の実演、および不燃合板・不燃木材被覆高断熱ボード等の新規開発された木質材料の展示・紹介

⑩ 愛知県森林・林業技術センター：スギ樹皮を使った木材着色製品およびスギの木レンガの展示・紹介

⑪ 長野県林業総合センター木材部：三種類の信州型木製ガードレールおよび接着重ね梁の展示・紹介

⑫ 静岡県林業技術センター：立木の強度評価機器 (Tree Checker) および木質廃材から製造されたペレットの展示・紹介

⑬ 三重県科学技術振興センター林業研究部：耐火性複合構造材の開発ならびに VOC 放散を抑制した木質材料の紹介

⑭ 富山県林業技術センター木材試験場：フィルム転写スギ内装材および木質建築用制振ダンパーの紹介

⑮ 岐阜県生活技術研究所：リグニン系高吸水性樹脂や木材のプラズマ照射等の紹介

⑯ 愛知県産業技術研究所：愛知万博で展示された千年時計の歯車など各種木質成形体、および圧縮木材の展示・紹介

⑰ 静岡県静岡工業技術センター：当該機関の研究活動のパネル展示

⑱ 静岡県富士工業技術センター：当該機関の研究活動のパネル展示

3. 学会ブースの話題

日本木材学会のブースも設けられ、人間と森との関係を歴史的な立場から捉えたメッセージ性に富むアニメーション (愛知万博出展時に作製) と日本木材学会の「すばらしい木の世界」を連続放映しました。また、「木のびっくり話 100」を販売しましたところ、準備した 125 冊が最終日 (11 月 6 日) の午前中までに完売いたしました。来場者は木材工業に関連する方がほとんどでしたが、内容の面白さ・多様さに惹かれてご購入いただいたのではと感じました。

4. 終わりに

愛知万博での展示に引き続く中部地区での学会記念行事でしたが、今回も多くの学生ボランティアの協力で、無事に終了いたしました。また、今回の企画にあたっては名古屋国際木工機械展実行委員会から多大なるご協力をいただきました。企画スタッフを代表して、心からお礼申し上げます。

アジアにおける最大規模の木工機械展として、本展示会が木材産業に関する国際的な技術交流や情報交換の場となり、また、木材加工機械の最先端の情報発信基地として次世紀に向けてますます発展することを期待いたします。■



写真 2 説明にも熱が入ります

日本木材学会創立 50 周年記念事業報告

「Mokkiten Nagoya 2005 記念シンポジウム」開催レポート

名古屋大学大学院生命農学研究科 吉田 正人

去る 11 月 3 日、名古屋国際木工機械展開催中の「ポートメッセなごや」に於いて、Mokkiten Nagoya 2005 日本木材学会創立 50 周年記念シンポジウム「環境共生社会に向けての木づかい；エコロジーとエコノミーの接点を探る」が開催された。(社)全国木工機械工業会、中部木工機械工業会、(社)日本木材加工技術協会中部支部、エコ展 21、ウッドミックの 8 団体の共催と日本木材学会の主催で行われた本シンポジウムには 100 名の参加者が集まり大変盛況であった。

シンポジウムは、コーディネーターの平嶋義彦氏(名古屋大学教授)とパネリストの井上篤博氏(セイホク(株)代表取締役社長)、神谷典明氏(マシキ・ジャパン代表)、川井秀一氏(京都大学教授、生存圏研究所所長)、神田憲二氏(王子製紙株式会社執行役員原材料本部長)、熊崎 實氏(岐阜県立森林文化アカデミー学長)の 6 名で行われた。13:30 に鈴木滋彦氏(静岡大学教授)の司会で、今村祐嗣氏(日本木



写真 1 発表会場風景



写真 2 パネルディスカッション風景

材学会会長)の挨拶に始まり、コーディネーターの平嶋氏がシンポジウムの趣旨を説明した。続いて、各パネリストが順に環境を考慮した経済について自身の活動や思うところを発表した。

その後、コーディネーターを中心に、国産材や外材を使っていくことについてパネリストがコメントし、アジアやヨーロッパの現状も紹介された。討論は、「環境税や炭素税の導入の是非」、「エコマテリアルである木材を使っていく社会的な奨励の必要性」、「木を切ることの社会的理解」「健康と持続可能な社会に配慮したライフスタイル」について、意見交換がなされた。会場からは、将来の木材産業の方向性、マテリアルリサイクル・サーマルリサイクルとしての木材利用についても意見が上がった。

シンポジウムは 16:00 に終了し、2 時間半にわたる討論は有意義なものであった。なお、このシンポジウムの詳細はウッドミックに掲載される予定である。 ■

日本木材学会創立 50 周年記念事業報告

IAWPS2005 が盛大に行われました

東京大学大学院農学生命科学研究科 和田 昌久

日本木材学会設立 50 周年記念事業の一環として日本木材学会と国際木材学会 (International Association of Wood Products Societies) の共催により国際学会 IAWPS2005 が 11 月 27 日～30 日の 4 日間、パシフィコ横浜にて開催された。大会期間中は概ね好天に恵まれ、460 名以上の参加者があった。

27 日 (大会初日)

オープニングセレモニーでは、飯塚堯介大会委員長によって開会が宣言され、これに引き続き 3 件の基調講演が行われた。Hou-Min Chang 氏 (ノースカロライナ州立大) は変質を抑えたりグニンの単離に関する研究の歴史から最近の成果を紹介された。MWL と CEL は本質的に同じであり、どちらも天然リグニンに近い構造であるが、MWL では木粉の摩砕過程での変質に留意する必要があるという内容であった。Kurt Messner 氏 (ウィーン工科大学) は白色腐朽菌による木材分解のメカニズムについて解説されるとともに、リグニンを選択的に分解する白色腐朽菌をスクリーニングによって選別し、これを利用した木質バイオマスの変換の可能性について述べられた。大熊幹章氏 (森林総合研究所) は 21 世紀の木材はどのように使われるべきであるかについて講演され、「これからの材料に求められる点は、資源としての持続性、高い性能と環境に対する低い負荷とともに、再利用および廃棄が容易であることが



写真 1 メインホールでの開会式

重要であり、そのような観点から木材はすばらしい材料であり、今後適切な技術開発によって、その特徴ある利用の発展が期待される」と述べられた。

午後から 30 日午前中までの 4 日間にわたり、セッションごとに口頭発表が行われた。各セッションのテーマは以下の通りであった。

- S1 木材資源と地球環境
- S2 細胞構成と木材組織
- S3 木材の物理特性と最新加工技術
- S4 木質材料、木質構造、環境共生住宅
- S5 生活環境とアメニティ
- S6 木材の接着および化学加工
- S7 エネルギー、化成品および木炭製品

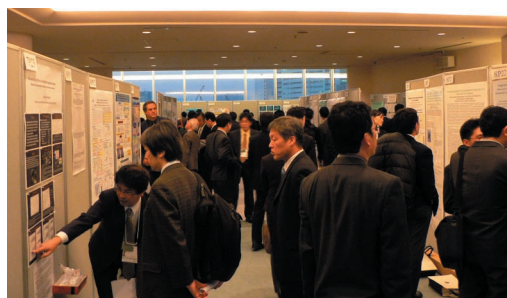


写真 2 ポスターセッション風景

S8 木材化学、パルプ並びに製紙化学

S9 木材の生物劣化と保存・キノコ生産

28 日 (大会二日目)

発表が行われる中、海外からの同伴家族を対象として飯塚夫人企画の鎌倉ツアーが開催され、10名の参加者があった。9時半過ぎに会場のホテルを出発し、鎌倉駅から長谷寺・鎌倉大仏・鶴岡八幡宮を電車と徒歩で巡った。また、鶴岡八幡宮の小町通りでは1時間のフリータイムを設け、通りに並ぶお店でお土産などを買っていた。5時前に会場のホテルに到着してツアーは終了となった。手作りのオプションルツアーではあったが、初冬の古都鎌倉を満喫することができたと参加者からは好評であった。



写真3 飯塚大会委員長夫妻

ポスターセッションは二日目と三日目の午後のコーヒブレイク後におこなわれたが、二日目のポスターセッション終了後には、ワインパーティーが行われた。赤ワイン、白ワインにチーズ各種を堪能した後、参加者は三々五々横浜の繁華街へ行かれたようである。

29 日 (大会三日目)

この日は懇親会が催された。ポスターセッションの後、横浜インターコンチネンタルホテル3階のボールルームに会場を移動して懇親会が開催された。カナダツガ(Western Hemlock)の響板で作られたバイ



写真4 海外からのVIPを交えての鏡割り

オリン等による四重奏が演奏され、終始和やかな会であった。参加者は200名を越えていた。お土産にはヒノキの升やスギとカナダツガで作られたワインスタンドが配られ、四重奏とともにこれも好評であった。

30 日 (大会最終日)

閉会式の前に行われた Manoel Sobral Filho 氏 (国際熱帯材機構 ITTO) の基調講演は、地球環境の面からみて熱帯雨林の重要性を謳ったものであり、それを保全するためには、熱帯雨林地域から産出される低質木質資源の利用技術を開発し、地域の安定化を計ることが重要であるとされた。

閉会式では、ポスター賞としてポスター番号 4P23 の So-Ra Han 氏、6P13 の Masaya Nogi 氏、9P35 の Geoffrey Daniel 氏が表彰された。次回の IAWPS 開催国である中国木材学会を代表して Jian Li 氏より挨拶があり、IAWPS2005は無事閉幕となった。 ■



写真5 懇親会での四重奏団の演奏

支部活動報告

「第 12 回日本木材学会九州支部大会」報告

「人工林スギ利用の幕開け」

宮崎県木材利用技術センター 飯村 豊

日本木材学会九州支部が主催し、日本木材加工技術協会九州支部と九州紙パルプ協会が共催する「第 12 回日本木材学会九州支部大会」が、宮崎県都城市木材利用技術センター（以下、センター）を会場に、8 月 22 日、23 日の両日開催された。参加人数は 100 名を超え、発表件数も口頭が 22 件、展示が 22 件の計 44 件と盛況であった。

参加者の内訳は、民間企業からが 41 名と最も多く（宮崎県からは 30 名）、次いで大学など教育機関から 39 名、公設試や行政、団体関係者が 33 名で、産学官はほぼ等しい割合となった。参加者の所属する地域は、九州各地に加え近畿、東京にまで及ぶ。

発表の内訳は、大学など教育機関から 17 件、公設試や行政、団体関係者から 15 件、民間企業から 10 件と、こちらも三者のバランスが良い。

発表の内容は、全体 44 件のうちスギに

関するものが 30 件と 70% を占めた。この数字は、全国に先駆け九州のスギが本格的な伐採時期に入ったこと、中でも宮崎が全国スギ素材生産量の 1/7 を担っていることを反映しているとも言える。民間からは、地域材の利用状況を具体的に示す工場出荷量や製造製品の品質、性能数値などが公表された。研究機関からは、地域材の特性を踏まえた新たな木材利用技術が事例と共に紹介された。大学・教育機関からは、将来を見据えたスギ資源の有用性をさまざまな角度から追求する先端的研究成果が発表された。

今大会は事務局が県の研究機関である木材利用技術センターに置かれたこともあって、従来の主に大学を会場にした運営の仕方とは少し趣を変えている。そのため運営委員会は宮崎大学と連携を図りながら、センター内の事務局とも協議を重ね、大会の運動方針を以下のように整理した。

1) センターは県民に開かれた機関であることから、事務局は、本大会の内容を関係先に通知すると共に本大会への参加を呼びかける。賛同を得た関係者には、木材学会への入会を勧め、会員として積極的な活動をお願いする。

2) センターは、本大会を通じて産学官の連携を強化し、地域材利用を推進するためにも、センターに所属する全員が本大会の運営に積極的に参画する。



写真 1 木材利用技術センター大会議室での口頭発表風景



写真2 木材利用技術センターラウンジでの展示発表

3) 本大会の運営は学会活動ではあるが、センター内で行われる事業と捉え、事業主(運営委員長)は万一の事故に対して、全ての責任を負う。運営に必要な臨時雇用のアルバイトには、労災保険を掛けるなど労働基準監督署の指導に従う。

上記のように支部大会の運営方針を明確にしたことで、支部大会開催の情報がいち早く各所に伝達され、多くの企業から参加を得ることができた。また、本大会が成功を収めた背景には、スギの新たな用途として外構や土木用途に積極的な研究開発を進めようとしている宮崎県の姿勢が挙げられる。外構や土木用途にスギを活用するには、宮崎県は温暖・多雨な地であることから、最新技術が求められる。そのため全国から木材保存技術が導入されたのに伴い、宮崎県のスギ生産拠点に保存処理施設を新設する県外企業が相次いでいるなど、宮崎県ではここ2、3年で大きな変化が起きている。今大会ではそうした最先端の研究開発動向をそのまま持ち込むことができた。

大会初日(22日)終了後の懇親会席上で挨拶された宮崎大学農学部教授河内進策九州支部長は、支部大会の盛況を祝し、発表内容の充実ぶりを「今大会はスギ、スギ、

スギである。居ながらにしてスギの現状を幅広く知ることができる。地域に密着した支部大会の特色が出せている。」と表現された。

さらに、来賓として出席された日本木材学会今村祐嗣会長からは、「参加者全員がイキイキしている。一人一人の顔を見て直ぐ分かった。スギの時代が九州からはじまったことが熱く伝わってくる。」とのコメントを頂戴した。

懇親会の最後を締めくくり、センターの有馬所長からは、2008年にこの宮崎で第10回世界木質構造会議(WCTE2008)が開催される旨がアナウンスされた。

最終日の23日は、全ての発表終了後、約50名の参加を得て現地視察会が開催された。視察地は、センター周辺の木材産業を代表する原木市場と大手木材企業の工場であった。原木市場では、スギの原木が柱適寸から中目材、さらには大径材へと確実にシフトしている状況を、企業の工場では、木材加工が製材から高次加工まで幅広く展開している現場およびバイオマスにも取り組む現状を視察した。

最後に、大会講演集への広告掲載にご承諾いただいた多くの企業および関係者に改めて御礼を申し上げる次第である。 ■



写真3 現地視察会(原木市場で大径化するスギの現状を視察)

日本木材学会中国・四国支部

第 17 回（2005 年度）研究発表会報告

鳥取県林業試験場 大平智恵子

2005 年度の中国・四国支部研究発表会は、平成 17 年 9 月 8 日（木）～9 日（金）に鳥取県立県民文化会館において開催されました。中国・四国支部の研究発表会は、中国 5 県及び四国 4 県が交互に持ち回りで毎年開催しています。本年度は北東の端、鳥取市での開催ということで、支部内の皆様にはご足労をおかけしましたが、関西支部からの参加をいただくなど、充実した研究会を開催することができました。

本年度は、第 1 日目を会員による研究発表会とし、第 2 日目は、一般の方にも気軽に参加頂ける公開講座を開催しました。さらに、昨年に引き続き、2 日目の午前中には森林バイオマス利用学会主催のバイオマス利用セミナーを共催し、一般の方の参加も多くいただくことができました。

1 日目の研究発表会では、口頭発表 18 件、展示発表 15 件の発表があり、活発な討論が繰り広げられました。中国・四国支部では、2002 年から木材学、林産学に関する研究発表の奨励と研究・技術発表の促進を目的として若手を対象とした研究発表賞を設けています。本年度は、口頭発表に鈴木利貞さん（香川大農）、渡邊恵里子さん（島根大総合理工）、展示発表に川上敬介さん（鳥取県林試）が発表賞を受賞されました。研究発表会終了後には、本部から今村会長に参加頂き、温かい交流会を行うことができました。

2 日目の森林バイオマス利用セミナーでは、広島県立林業技術センター、鳥取県林

業試験場、高知県立森林技術センター、山口県林業指導センターから、それぞれの地域での取り組み事例が報告されました。午後の公開講座は「歴史の知恵に学ぶ木の使い方」をテーマとして、大会委員長である鳥取大学古川郁夫先生の「古代住居建築に用いられる樹種」の講演を皮切りに、鳥取環境大学浅川滋男先生と北原昭男先生より「弥生時代の住まいと建築技術～妻木晩田遺跡と青谷上寺地遺跡～」、「伝統構法に学ぶ木造建築の耐震性」の講演をいただきました。歴史に興味のある方や伝統構法に関心のある建築業界の方が興味深く聞き入っておられました。

大会委員長古川先生の「無理せず楽しんで頂きましょう。」という方針のもとに運営が進められ、アットホームな 2 日間にできたと思います。御協力いただいた皆様に、この場をお借りして、改めてお礼申し上げます。

2006 年は香川県で開催されます。支部を問わず、多くの皆様のご来場をお願いします。 ■



日本木材学会中部支部

中部支部大会開催顛末記

福井県総合グリーンセンター 土田博澄

10 月 13 日、14 日の両日福井ワシントンホテルにおいて、2005 年度 日本木材学会中部支部大会を開催させていただきました。

中部支部が発足して 17 年になりますが、当県には木材関係の研究を担当する大学・講座がないことから、当所の諸先達も含めて本県での開催を固く固辞し続けて来ました。が、2 年前のある日、前支部長の奥山先生から今回はどうしても福井での開催を了解してほしい旨の電話をいただきました。一人では判断できかねることなので林業試験部長に相談したところ、何ごとにも前向きな部長さんは、「やれ。なんとかなる」と即断されたので、どんな準備・作業が必要かもわからないまま了解の返事をしました。

研究ニーズが多様化・高度化し、しかも速いスピードで研究成果が求められ、評価される時代のなかで、少人数で県産材の利用拡大、さらに木質バイオマスの有効利用という研究課題に取り組んではいるが、学会で発表のできるような成果を未だ出せず、木材学会は雲の上。支部大会にも出席したこともなく、大会の様子そのものも全くわかりませんでした。

不安なまま月日は過ぎ、支部長も徳本先生に代わって、今年を迎えてしまいました。いまさらお手上げですとも言えず、勝手がわからないため、まずどんな準備が必要かを徳本支部長にお聞きし、待ったなしでスタート。先生もとんでもないやつが担当になったと不安になられたことと思います。

第一回会告、第二回会告までは出せましたが、第三回会告では発表者・発表課題を掲載する必要があります。ところが締切り 1 週間前になっても申し込みは 2 件のみ、あせりました。急遽徳本先生に相談。支部評議員に Fax で発表を促していただくよう依頼しました。お陰様で締切り日過ぎには、前年以上の申し込み件数になりました。

それから課題・発表者の確認、原稿の確認と忙殺されましたが、「福井県」は小学高学年相手のアンケートによると、どこにあるかがわからない日本一影の薄い県のようにです。さりとて男女の平均寿命、一世帯当りの持家面積・所得とも全国 2 位を誇っています。このような「福井県」を認知してもらうべく職員一同奮闘しているところであり、要旨集の 2 頁目に福井県のカットをいれさせていただきました。この件についても徳本支部長に相談させていただきましたが、そんな前例は無い。と言われてしまいました。

そんなある日、所長が来られて、「1 ヶ月余りそんなことばかりやっているが、それで採算面はどうなんだ。赤字になったら誰が負担するのか、参加者を増やすべく方策は考えているのか」と言われましたが、こればかりは相手のあることなので何ともし様がありません。結局心やさしい所長が金策に駆け回ってくださり、終わってみれば足を出さずに済みました。

また、大会当日所長が、大学講座も無い当県のような県で学会を開催するのは、参加者の確保や費用等の負担が多すぎる。大

学を有する県だけで開催するようにと挨拶で言うからな。と言っていました、心やさしい所長は結局言いませんでした。

大会 2 日目には福井のイメージアップを目論んで「永平寺特別拝観」として募集しましたが、永平寺へ直接申込みした際にはあっさり断られ、役場に泣きついてようやく実現。「妙高台」「光明蔵」を拝見することができました。案内の僧侶が、永平寺内で修行する者でもこうした機会が無いところには入れない、と言われていたことから、一般の人ではなかなか拝見できない特別の場所だったようでした。

早いものであれから 2 ヶ月が経とうとし

ていますが、終わってみれば「熱さ」を忘れ、日常の業務に戻っています。

最後に支部長、会員の皆様および福井県内林業団体のご協力をいただき盛況のうちにおえることができましたことを感謝申し上げます。 ■



写真 1 曹洞宗大本山 永平寺「光明蔵」での記念写真

日本木材学会北海道支部

北海道支部研究発表会報告

北海道大学大学院農学研究科 玉井 裕

去る 11 月 2 日 (金) に旭川市道北地域地場産業振興センターにおいて、第 37 回日本木材学会北海道支部研究発表会が行われました。

本年度は口頭 12 件および展示 9 件の木材科学における最新の研究成果が発表されました。発表内容は木構造、強度、組織構造、パルプ、新素材、きのこ、抽出成分、製炭、バイオトイレ等多岐に渡り、木材科学を全般的にカバーするものでした。また、本年度は新たな試みとして企業製品などの展示コーナーを設け、6 社から自慢の技術・製品が披露されました。

一昨年より優秀な研究発表に対して「北の木材科学賞」を設けて表彰しておりますが、本年度は参加者全員の投票に因りまして、口頭発表は、中村 淳氏（北海道大学

大学院農学研究科）「表面プラズモン共鳴を用いたモノリグノール類とヘミセルロースの相互作用解析 (VI)」、展示発表は後藤 裕次郎氏（北海道大学農学部）「エネルギー作物としてのケナフの利用 1. ケナフの熱分解ガス化による水素生産」に授与されました。

研究発表会プログラムの詳細は下記 URL をご参照ください。

http://www.agr.hokudai.ac.jp/wrsh/files/happyou2005_11.pdf ■



新刊書紹介

木工技術シリーズ〈6 巻〉

東京大学大学院農学生命科学研究科 太田正光

産調出版から「木工技術シリーズ」という 6 冊シリーズの木工技術の概要についての解説書が刊行された。イラストや写真の多い、とてもカラフルな楽しい技術書である。我が国の専門家には、残念ながらこのような書物を作る能力はない(言い過ぎかも知れないが)。オリジナルはイギリスで刊行されたもので、原著者の A. Jackson と D. Day は共著で膨大な数の木工ならびに DIY 関係の類書を著している。

内容を見ていくと第 1 部の「木工の基本」では木工技術の概要について手際よく解説されている。第 2 部「木材の選択」では、材料としての木材をどのように選ぶべきかを解説しているのだが、50 種以上の木材標本の写真は見るだけでも楽しめる。第 3 部「工具」は、西欧の木工具が中心で、若干の注意が必要ではあるが、電動工具の解説は彼我の差は無く、役に立つし、また、日本の工具にも一章が割かれているので見比べてみるのも良い。第 4 部は「ルーター」にあてられている。日本では日曜大工でルーターの位置づけはそれほど高くないと思われるのであるが、本書中に示されているさまざまな工夫が凝らされたガイド等を



整えると、これほどのことがルーターひとつで出来てしまうのかと驚かされる。第 5 部「継ぎ手」も詳しく作り方が説明されていて箱物などを手作りしようと言う凝り性の方には参考になる。第 6 部は「仕上げ」ということで、着色ならびに塗装について解説されている。

さて、翻訳物の技術書などには怪しげな和訳が付きもので、つい腹を立ててしまうことも多いのだが、本書はその点でも全く安心である。我が国の木工技術の専門家である喜多山 繁、赤松 明、村田光司の 3 氏が監修者として参加されているからである。

木工技術全集 申込書

FAX 03-3366-3503 産調出版御中

日本木材学会会員特別価格

1 セット 定価 20,160 → 18,200 円 (税込)* 代引きの場合、手数料・送料 (813 円) は、産調出版が負担します。
(〒・住所・氏名・tel)

____ セット

○印でお選びください (代引/郵便振替/銀行振込)

ㄴ木材を身近に感じるには、実際に木材を加工して何か製作してみるのが一番の近道であろう。本書をそのような方の座右の書としてお薦めする。

なお、日本木材学会会員の方は、14 ペー

ジ下の申込用紙で 6 冊をセット購入すれば割引価格で購入が可能とのことで、その場合には「木工技術全集」と銘打たれた化粧ケースも付いてきます。 ■

データ : B5 版 / 各 128 頁 / 定価・各 3,200 円 (税別)

今後の「ウッディエンス」と広報・情報委員会の課題

広報・情報委員会委員長 太田正光

木材学会の新執行部はこれまでの広報委員会と情報処理委員会を統合して広報・情報委員会を発足させました。これには学会の広報活動を、今日の情報化社会に見合ったアップデートなものとしたいとの意気込みが込められていると思います。

木材学会の広報誌「ウッディエンス」はこれまで紙の媒体で発行されてきました。印刷物は読みやすい、扱いやすい、というのが大きな利点ですが、会誌に綴じ込んだり、支部や連絡幹事を通して配布していただく以外には郵送に頼らざるを得ず、対費用効果を考えると、この先の発展はあまり期待できません。

今期の広報・情報委員会の使命は、この状況を打破することにあります。インターネットを活用した情報普及活動に主体を

移していくことが必要でしょう。前号から「ウッディエンス」と同じものは学会のホームページから PDF ファイルをダウンロードしても読むことが出来ます (下の URL を参照)。こちらは写真をカラーで見ることが出来ます。会員の方にはぜひこちらをご覧になっていただければと考えています。

将来的には「ウッディエンス」はメールマガジンのような形態にした方が、より広範な読者にまで情報を届けることが可能になるのではなからうかと思っています。また、団体としての学会活動の広報は重要ですが、個々の会員の研究成果などを社会に広めていくことも、今後「ウッディエンス」が担っていくべき役目ではないかとも考えています。皆様のご支援をお願い申し上げます。 ■

日本木材学会広報・情報委員会 (2005・2006 年度)

委員長 太田正光 (東大)

委員	平井卓郎 (北大)	栗本康司 (秋田木研)	鈴木滋彦 (静大)	尾崎士郎 (鳴門教育大)
	船田 良 (農工大)	木口 実 (森林総研)	吉岡まり子 (京大)	見尾貞治 (岡山木技セ)
	和田昌久 (東大)	近藤隆一郎 (九大)	奥村正悟 (京大)	杉山淳司 (京大生存研)
	岡山隆之 (農工大)	福島和彦 (名大)	竹村彰夫 (東大)	

連絡先 〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

東京大学大学院農学生命科学研究科 生物材料科学専攻

電話 03-5841-5248 / FAX 03-5684-0299 (共用)

「ウッディエンス」ホームページ <http://www.jwrs.org/koho/download.html>

広報委員会メールアドレス koho@jwrs.org

環境問題に配慮した
鹿印の接着剤・環境資材

OSHIKA 株式会社オーシカ
Adhesives & Construction materials

〒174-0041 東京都板橋区舟渡 1-4-21

TEL 03-5916-8858 <http://www.oshika.co.jp>

営業所 東京・札幌・仙台・新潟・北関東

名古屋・大阪・金沢・広島・高松・九州

日本初!! JAS認定 構造用異樹種集成材

ハイブリッド・ビーム

外層部にベイマツ、内層部に国産スギを使用し
強度等級 E105-F300を実現!

住宅用構造材の専門メーカー

③ **中国木材株式会社**

JAS認定工場 LT-1号M.Fc S.Fc / JAS認定工場 LT-313号M.Fc S.Fc

本社／広島県呉市広多賀谷3丁目1-1 ☎0120-707-141
<http://www.chugokumokuzai.co.jp>

新しい素材の切削加工を考える

KANEFUS

兼房株式会社

本社・工場 愛知県丹羽郡大口町小口1-1 〒480-0192
TEL(0587)-95-2821 FAX(0587)-95-7225
E-mail sales-do@kanefusa.co.jp
<http://www.kanefusa.co.jp>
支社・営業所 名古屋・東京・大阪・札幌・仙台・広島・福岡



ADPAC-SYSTEM

ホルムアルデヒド・VOC放散試験チャンパー装置

テクニカルセンター：分析・代行試験業務

<http://www.adtec-tc.co.jp/>

<http://www.airgood.co.jp/>

ADTEC CORPORATION

有限会社アドテック

〒223-0058 横浜市港北区新吉田東5-66-29

TEL: 045-547-1916 FAX: 045-547-1944

テクニカルセンター：横浜市港北区新羽町1659-202



KRボンド 水性高分子・イソシアネート系
木材接着剤 (水性ビニルウレタン系接着剤)
KOYO BOND
WATER BASED POLYMER-ISOCYANATE
ADHESIVE FOR WOOD
ISO9001認定取得



努力+ヒラメキ+持続=創造

INSPIRATION WITHOUT EFFORT IS INEFFECTIVE
BUT CONTINUOUS EFFORT PLUS INSPIRATION IS CREATIVE



光洋産業株式会社
www.koyoweb.com

〒101-0044
東京都千代田区鍛冶町1-9-9 石川ILKビル
Tel.03-3252-1701 Fax.03-3252-1707

入門者から熟練者まで。木材塗装の座右の書

木材の塗装

付／索引と用語
解説 (23 頁)

木材塗装研究会 編

A 5 判 298 頁、カラー口絵 6 頁

定価 3,675 円(税込)、送料 200 円、ISBN4-86099-208-3

より美しく、より高性能の塗装を行うには木材の性質、塗料、
塗装方法などのあらゆる知識が必要である。本書は木材塗装に
関するわが国唯一の公的研究会による、基礎から応用、実務ま
でのあらゆる事項の解説書である。



海青社

〒520-0112 大津市日吉台2-16-4
Tel: 077-577-2677 Fax: 577-2688
<http://www.kaiseisha-press.ne.jp>

森林資源循環型企業

私たちは資源循環型企業としてマレーシアで
アカシア・ハイブリッド植林事業に取り組んでいます。



ウッドエンジニアリングで伸びる

越井木材工業株式会社

大阪市住之江区平林北1-2-158 TEL:06-6685-2061(代)



ここにも、「Made in 日本製紙」。



日本製紙株式会社

www.np-g.com